

町史のひとこま

(第六回)

新原炭坑の米騒動(二)

海軍探炭所新原炭坑は、第一坑から第七坑までであったが、米騒動の起きた大正七年は、第一

第二坑は採鉱を終えて廢坑となり、第三、第七坑が稼働中であつた。坑夫は二、三千人という

海軍直属の炭坑という性格から、経営にあたるのは軍人であり、経営も探炭も軍隊式の厳格な規律のもとにおこなわれ、ややもすればそれが坑夫たちの不満のタネとなつた。

八月二十六日午後六時頃、炭車の配給不足に業を煮やした青年坑夫二、三十名は、勝手に持場をはなれて坑外へ出て行つた。

その日、四坑の坑夫集会所では活動写真(映画のこと)が興行中で、これらの坑夫はゆかたがけで集会所に向かった。木戸番が木戸銭(入場料)を要求すると、怒つた坑夫たちは「木戸銭もクソもあるか、打ちこわして

しまえ」と叫んで、ツルハシの柄やコン棒で小屋をこわし始め

「今度は事務所をやつつけろ」などの声がとびかううち、二、三

山の神公園にある旧六坑の「山神社建立寄附金芳名録」の石碑。米騒動から8年後の大正15年に建てられた。(写真)



た。この活動小屋は六間に十二間(百四十四畳敷)の広さで、千人近い見物客があつたのだが、泣き叫ぶ人あり、助けを求める人あり、でたちまち大混乱となつた。

「坑夫の同士打ちはやるな」

「本部事務室をこごとく

打ちこわし、海軍探炭所長徳永

晃海軍主計大監の官舎では、屋

外に放り出した衣類や家具に火

をつけ、ようやく消し止めたも

の、あやうく海軍探炭所本部

に燃えうつらればかりであつた。

福岡日日新聞は、新原炭坑

米騒動をこのように伝えている。

第四坑から第六坑へと次々に

燃えあがる「新原炭坑暴動」に

ついに軍隊が鎮圧に出動した。

福岡連隊からは門司大尉指揮

する第一中隊が戦時武装を整え

て午後十一時、十台の自動車で

出発、千代町からの十台を加え

て二十台が新原へと向かった。

鎮圧部隊は宇美の酒造家小林作

五郎邸に本拠を置き、各坑の配

置に午前六時までかかった。福

百人にふくれあがつた坑夫たち

は、第三、四坑裏門に向かい、分

配所、非常納屋(ボンブ小屋)

を破壊、守衛控所や第四坑現場

事務所を経て海軍探炭所本部を

襲つた。午後九時頃のことであ

つた。本部事務室をこごとく

打ちこわし、海軍探炭所長徳永

晃海軍主計大監の官舎では、屋

外に放り出した衣類や家具に火

をつけ、ようやく消し止めたも

の、あやうく海軍探炭所本部

に燃えうつらればかりであつた。

福岡日日新聞は、新原炭坑

米騒動をこのように伝えている。

第四坑から第六坑へと次々に

燃えあがる「新原炭坑暴動」に

ついに軍隊が鎮圧に出動した。

福岡連隊からは門司大尉指揮

する第一中隊が戦時武装を整え

て午後十一時、十台の自動車で

出発、千代町からの十台を加え

て二十台が新原へと向かった。

鎮圧部隊は宇美の酒造家小林作

五郎邸に本拠を置き、各坑の配

置に午前六時までかかった。福

この新原炭坑の「暴動」が米

騒動と呼ばれるのは、全国的な

米価の高騰が背景にあつたから

だ。坑夫側は米の値下げ、賃金

値上げを要求、この点では労働

運動の芽ばえとしての歴史的な

意義もあつたとと言えるだろう。

これは筑豊地区の炭坑の米騒動

も事情は同じで、大正デモクラ

シーと言われた社会的背景があ

り、「熔鉱炉の火は消えたり」

と言われた八幡製鉄所の大スト

ライキが大正九年のことである。

米騒動を労働運動という側面か

ら見直そうとする人たちも最近

では多い。

筑豊地区の民間の炭坑とちが

い、新原炭坑の場合は、①海軍

直属の炭坑でおきた米騒動であ

つたこと②当然、軍の出動が予

想されたこと③要求の交渉相手

が海軍省だったこと④比較的め

ぐまれた労働条件にある坑夫た

ちの暴動だったこと、などに特

色があると言えるだろう。(以下

次月号)

(町誌編集委員会事務局

石滝 豊美)
